現代社会文化研究 No.49　2010年12月

「親疎関係」と「フェイス複合現象」の相関関係
―日本人大学生の「断り」を中心に―

権　英　秀

Abstract

This paper discusses what kinds of Face Composition Phenomena are observed, in the case of refusal conversation, according to the relative degrees of intimacy between participants. The results of Face Composition Phenomena show:

1. Towards their interlocutors with higher degree of intimacy, Japanese university students mostly use refusal strategies of 'Reason', 'Avoidance', and 'Statement of Alternative' considering Speaker's Face. This is because they take friendship with the current requester into consideration.
2. Towards their interlocutors with lower degree of intimacy, Japanese university students mostly use refusal strategies of 'Apology' for saving requester's face. This is because they consider that it is important to keep good human relations with the requester in the future.
3. Towards their interlocutors with lower degree of intimacy, Japanese men and women mostly use refusal strategies for saving requester's face. Moreover, men use refusal strategies of 'Semi Face' for saving their own face as refuser.

キーワード……　意味公式(semantic formulas)　**ポライトネス**(politeness)
フェイス複合現象(face composition phenomena)

1．「断り」とは

「断り」とは、相手(依頼者・要求者など)の意図に応じず、断る側の領域(「自由にいたい」のような気持ち)を守る発話行為[1]である。「断り」という発話は相手(依頼者・要求者など)との人間関係に影響を強く及ぼしやすいので、断る側は断った後のリスクを減らし「断り」を成功させるために、断る側は依頼者との諸関係を慎重に考慮した上で、「断り」を遂行しなければならない。相手との諸関係には、親疎関係、年齢層の差、発話内容(依頼・要求などの内容)などがかかわるであろう。

Beebe et al. (1990)は、「断り」の構造に焦点をあてた「意味公式(semantic formulas)」を用

いて、「断り」のストラテジーを研究した。しかし、この分析方法は言語形式に対する分析には適しているものの、「断り」表現そのものに対する言語使用や言語運用についての分析までには至りがたく、「意味公式」の短所として指摘されてきた(任 2003、이 2003)。そのために最近は「ポライトネス」という語用論の観点から分析がなされはじめている。

しかし、「意味公式」の言語形式面と語用論からの言語運用面を分析する場合、「断り」の先行研究では言語形式面と運用面を関連付けて説明ができず、「意味公式」と「ポライトネス」は質が違うので同時に扱えないとも言われている(任 2003)。

本稿では、「親疎関係」を「断り」の軸にした場合、「日本人（大学生)」の「断り」について、言語構造は「意味公式」を用いて、言語運用は「フェイス複合現象」を用いて詳しく考察する。

2．「調査」

②「 調査期間： 2007 年 9 月～2008 年 3 月

② 調査対象者： 日本人大学生 50 人を対象にした。

③ 調査方法： 「ビデオ録画によるロールプレー調査」

ロールプレー（role play）とは、話し手（働きかける人）が聞き手（調査対象者）と対話などを主導し働きかけながら、ある置かれた状況の下で会話の参加者がどのような会話をするかを録音、或いはビデオなどで録画する調査である。そのために既存の調査（アンケートなど）より、自然な会話の分析が可能である。さらに Miriam & Bodman（1993：65-74）によれば、turn-taking や同じ情報の繰り返し、同じ意味公式の繰り返しが見られると指摘している。しかし、ロールプレーはアンケートのように多くのデータを集めるには限度がある。

④場面の設定：今回、ロールプレーの内容は「お金の貸し借り」と「アンケート調査」[2]であり、「親疎関係」による「断り」の異同を考察するために、各内容は「親しい人」と「親しくない人」[3]から依頼されるように設定した。

⑤文字化の方法：

ビデオ録画によって収集したデータの文字化は、研究の目的に応じて一部独自の記号を筆者が付け加えた。収集したデータは筆者が文字化をし、分析を行った。ただし、正確に聞き取れない部分は調査対象者に聞かせて確認作業を行った。そして調査に参加していない日本人と韓国人に検定[4]を依頼した。

表 1）文字化の記号

H：働きかける人を指す。

J：・日本人の調査対象者を指す。（**K** は韓国人を指す）

　・「断り」の発話は太文字で表す。

イントネーション：通常よりイントネーションに変化が見られる場合、上昇「↑」、下降「↓」とする。

・・・・：・言いよどみや、間を表す。「・」の数は推定される拍数の長さである。

　・発話導入の呼吸段落

　　例：・・・・は4秒ぐらい「言いよどみ」或いは「間」がある。

　　例：・すみません。ちょっとその日は。

　　（「すみません」の発話導入の前に呼吸をする。）

---------：調査対象者が通常より早く話すことを表す。

〜：長音、！：驚き、？：疑問

プライバシーの保護のために調査対象者の名前は００に記する。

３．「ポライトネス」

Brown and Levinson（1987、B&L）は、Goffman（1976）のフェイス（face）[5]を引用し、人間には **positive face**（積極的フェイス）[6]と **negative face**（消極的フェイス）[7]があり、相手（聞き手）のフェイスや自分（話し手）のフェイスを傷つけたり、傷つけられたりすることもあると述べている。さらにこのようなフェイスを傷つける可能性が人間のコミュニケーションには潜在的にあると指摘している。コミュニケーションにおいて、相手または自分のフェイスを脅かす行動（Face-Threatening Acts：FTA）の可能性を無くすために会話の参加者は **positive face** あるいは **negative face** を念頭においた **positive politeness**（ポジティブ　ポライトネス）[8]か **negative politeness**（ネガティブ　ポライトネス）を目的に何らかのポライトネス・ストラテジー（politeness strategy）を使用する。ポライトネス・ストラテジーは聞き手と話し手に関わる「社会的距離（social distance）」と「支配力（power）」、そして「ある行動の負担度（absolute ranking of imposition）」によって「FTA の見積もり（weight）」[9]が決まり、FTA の見積もりが大きくなればなるほど、「FTA を行わない>off record>negative politeness>positive politeness>bald on record」のような順にストラテジーを使うことになる。

① FTA を行わない：事柄がフェイスを脅かす可能性が極めて高いので、あえてそれを行わない方略である[10]。

② off record：事柄に対して直接に言わず、ヒントや連想の手がかりを与えたり、皮肉・比

喩を使ったり、ほのめかしたり表に出さない方略である。

③ negative politeness：他の人から邪魔されたくない、抑えつけられたくない、行動を自由に選択したいといった欲求に配慮したポライトネスである。いわゆる negative face に訴えかけるストラテジーである。

④ positive politeness：他の人に好かれたい、認められたい、評価されたいといった欲求に配慮し、映ったポライトネスである。いわゆる positive face に訴えかけるストラテジーである。

⑤ bald on record：単刀直入に事柄を言う何も緩和策を講じない方略である。

5つのストラテジーと「断り」の主な「意味公式」を形式に基づいて分類すると次[11]のようである。

①：沈黙(・・・)、笑い(ハハハ)
②：批判(このやろう)、条件提示(＊＊日ならできますけど)、感嘆詞
③：情報要求(お母さんは何をなさいますか)、ヘッジ(私はちょっと)、繰り返し、謝罪(ごめんなさい)
④：積極的陳述(事情は分かるんだけど)、冗談、約束(後で連絡しよう)、言い訳(時間がない)、呼称(＊＊先生)、代案提示(＊＊に頼んだら)
⑤：直接的断り(嫌だ)

「断り」の「意味公式」における短所を補うために、先行研究ではポライトネス理論によって言語使用や運用などを分析している。しかし、上記のように「意味公式」とポライトネス・ストラテジーを同一化して分析しているために、「意味公式」の言語使用の説明が画一化される恐れがある。さらに、このような問題点はB&Lのフェイスの概念に対する捉え方からも覗うことができる。

例1) 先生の「学会の手伝いの要求」－学生の「断り」

先生：え～と、12月21日に学会があって、ちょっと手伝ってほしいんだけど、
　　空いている時間でいいから手伝ってくれないか。
学生：申し訳ありません。その日バイトがありまして、忙しいんですけど。
（「謝罪」＋「理由」）

例2) 兄の「ものの買出しの要求」－弟の「断り」

兄：お菓子と飲み物適当に買ってきてくれない。
弟：えっ、忙しいよ。　（「理由」）

例 1 と例 2 の「断り」では、「忙しい」という自分の事情を説明しながら断っており、先行研究では、「理由」に対する言語運用はすべて断る側の positive face を念頭に行っていると分析している(熊井 1993、寥 2004 など)。例 1 の「忙しい」は「理由」として、学生は「学会がある日にバイトのせいで忙しいから手伝いはできない」という「断り」を先生に伝え、先生から「断り」の事情を分かってもらおうとしている。これは先行研究の分析と同様に、断る側が自己イメージのために用いた「理由」であろう。

しかし、例 2 の場合は、兄の「ものの買出し」について、断る側が置かれている事情である「忙しい」ことを分かってもらうつもりではなく、断る側が「現在忙しい環境にいるから兄の「ものの買出し」には応じない・応じたくない」という断る側の領域、「要求に従わず、自由にいたい」である negative face に働きかけていると見なされる。さらに次の例においても「意味公式」とポライトネス・ストラテジーの同一化によって言語使用の単純化になりがちなケースが現れる。

例 3）先生の「学会の手伝いの要求」－学生の「断り」

先生：え～と、12 月 21 日に学会があって、ちょっと手伝ってほしいんだけど、
空いている時間でいいから手伝ってくれないか。

学生：あのう～、ちょっとできないのですが、すみません。＊＊君はその日大丈夫だと思いますが、頼んでみましょうか？　（「直接的断り」＋「謝罪」＋「代案提示」）

例 4）父の「洗濯の要求」－息子の「断り」

父：洗濯回しといて！

息子：パス。あっちの暇そうなやつにやらせば。　（「直接的断り」＋「代案提示」）

「代案提示」は相手と一緒に解決案を模索しあって、相手に解決策を教えるストラテジーである。そのために、相手の positive face に働きかけるものとして先行研究では分析されている。例 3 において、先生は学生に「相手は年下であり、弟子であるために、相手に学会の手伝いを頼める」と思い込んで positive face に働きかけて要求しているが、学生は手伝いの出来ない状況でいるために、「断り」の代わりに先生の positive face に働きかけようと他の解決案を出している。これは positive face を念頭においたストラテジーである。

しかし、例 4 では異なった「代案提示」が現れる。父の洗濯要求に対して、息子は「直接的断り」を用いた後、「代案提示」を使用しているが、ここでの「代案提示」は断る側に押し付けられた責任を単に第 3 者に転嫁させる働きであろう。「私はやりたくないから、他の人(弟)にやらせろ」という断る側の negative face を守ろうとすることが分かる。

B&L(1987)は「断り」発話行為について、相手の依頼から断る側のフェイス(依頼者の要求・

依頼などに応じず、自由にいたい）である negative face を守る行為であると述べている。しかし、「断り」には negative face に働きかける「意味公式 or ポライトネス・ストラテジー[12)]」以外にも、付加的（「断り」意味を表す部分以外のもの）に使用されるものがある。言い換えれば、「断り」表現の中では断る側の negative face 以外にも、断る側の positive face や依頼者のフェイスに関わる部分もあり、「断り」の中に単数のフェイスを念頭に何らかのポライトネスを使用するのではなく、さまざまなフェイスによって、「断り」の発話行為を遂行すると考えられる。これについて、Thomas（1995）や宇佐美（2002）、権（2007b）なども指摘しているように、B&L のフェイスの概念には再考察の余地がある。次の例を見よう。

例 5）弟の「お金の要求」－姉の「断り」

弟：お姉ちゃん、今月お金やばいから一万円貸してくれない。

姉：え～いやだ。あたしもほしいものがあってさ。今度お金できたら貸してあげるよ。

（「直接的断り」＋「理由」＋「約束」）

姉は弟から「お金の要求」をうけて、「断り」の初出からアカラサマに断ることから、姉がお金を守ろうとし、自身の negative face に働きかけていることが分かる。この「直接的断り」は、B&L（1987）の述べる negative face に働きかけた negative politeness であろう。しかし、「直接的断り」の後ろは、negative face を念頭においた「意味公式」以外に、なぜ negative face に働きかけたかを相手に分かってもらおうと「理由」を説明している。これは相手から認めてほしい、よく見られたいという気持ちを表す positive face にあたると思う。さらに“今度お金できたら貸してあげるよ”のように相手にわざわざ約束を言い出すことによって相手のフェイスを立ててあげようとする意図が見られる。この部分は「姉は家族であるし、自分（弟）よりお金がるだろう」という思い込みから要求してきた依頼者の positive face に対する配慮であろう。

よって、弟からの要求に対して、姉は自分の positive face、negative face、さらに相手（姉）の positive face まで考慮したフェイスの組み合わせで「断り」を遂行している。即ち、1つの「断り」発話行為の中では、「断り」の部分である negative face 以外にも、さまざまなフェイス作用が行われることが分かる。特に「断り」発話行為は、相手の意図を断る側が遂行してあげることではなく、自分の立場や自由を守ろうとする **negative politeness** に近いものであるが、その中にはさまざまなフェイス（断る側や依頼者の positive face）が組み合わされる場合があると言えよう。

4.「意味公式」

Beebe et al. (1990)や熊井(1993)などの「意味公式[13)]」の分類を参考の上、若干修正を加えて、以下のように分類した。

表2）意味公式の分類

意味公式	意味公式の内容および例
「直接的断り」(Direct＝D)	単刀直入に断るもの。　例）いやだ。
「理由」(Reason＝R)	断らざるを得ない状況説明。　例）お金がないから。
「謝罪」(Sorry＝S)	断ることに対するお詫び。　例）ごめんね。
「回避」(Avoidance＝A)	冗談・繰り返し・ヘッジ・話題転換・沈黙など。 例）ちょっとあれなんだね。
「非難」(Insult＝I)	相手や要求内容について責める。 例）いやだって言っているでしょ。
「代案提示」(Statement of Alternative＝AL)	別の解決案を出す。 例）００にあたってください。
「情報要求」(Question＝Q)	相手に情報を聞くもの。例）どこに使うの？
「積極的陳述」(Statement of Positive Opinion＝PO)	上記に該当しないもので、約束や共感の気持ちなど。 例）また今度。
「感嘆詞」[14)] (Filler=F)	発話を起こす際や、文中の中に現れる「間[15)]」である。 例）あ～。
「呼称」(Name＝N)	相手の名前や職名。　例）００ちゃん。
「笑い」(Laugh=L)	声を出して笑う場合。　例）ははは。

5.「フェイス複合現象」

5.1　「フェイス複合現象」の定義および下位分類

例5のように、「断り」表現には「断り」の意図を言葉で表す「直接的断り(**Do the FTA**)」と「直接的断り」の前後にくる諸意味公式(「**間接的断り**」)の組み合わせで構成されている。

これに対して、Beebe et al.（1990）は「断り」の構成について、「直接的断り（Direct）」と「間接的断り（Indirect）」の組み合わせによって「断り」が成り立つと分析している。これは「断り」に、断る側の negative face に働きかける部分（「断り」の意味が入っている所、「直接的断り」にあたる）と「直接的断り」以外の「(間接的な）断り」との組み合わせと見られる。そして Olshtain & Cohen（1983）も発話行為における言語表現は１つもしくはそれ以上の一連の意味公式から構成されていると指摘している。

つまり、「断り」表現の中では断る側の negative face 以外にも、断る側の positive face や依頼者のフェイスに関わる部分もある可能性は否定できない。したがって、このような１つの発話にフェイスが複数現れる場合を「フェイス複合現象」と定める。

表 3）　「断り」におけるフェイス複合現象

「直接的断り」		フェイス	下位分類
on（「断り」の意味を言葉で表す場合） or **off**（「断り」の意味を言葉で表さない場合）	＋	**SPEAKER' S FACE**	断る側の positive face
			断る側の negative face
			断る側の semi face[16]
		MUTUAL FACE	依頼者の positive face＋断る側の positive face
			依頼者の positive face＋断る側の negative face
			依頼者の positive face＋断る側の semi face
		HEARER' S FACE	依頼者の positive face

表に表記する場合は、「直接的断りのみ」:「直/断のみ」、**SPEAKER' S FACE : S/F**、**MUTUAL FACE : M/F**、**HEARER' S FACE : H/F**、断る側 :「断」、依頼者 :「依」、**positive face : p/f**、**negative face : n/f**、**semi face : s/f** と略す。

5.2　本論文における表の読み方

①**ON** :「断り」の意味を言葉で表に表す「直接的断り」が伴われることを示す。
例）

S/F	
「断」－p/f	
ON	.
40	.

読み方：「直接的断り」＋SPEAKER' S FACE の「断る側の positive face」の組み合わせが 40 回使用されている。

例）　無理。私も今いそがしいからね。
（「直接的断り」+SPEAKER' S FACE の「断る側の positive face」）

②**OFF**：「断り」の意味を言葉で表に表す「直接的断り」がない上で、行われるフェイス作用。

例）

S/F	
「断」－p/f	
	OFF
	20

読み方：「直接的断り」が現れず、SPEAKER' S FACE の「断る側の positive face」のみで 20 回使用されている。

例）　私も今いそがしいからね。　　　（SPEAKER' S FACE の「断る側の positive face」）

6．日本人の「断り」

6.1　「フェイス複合現象」の観点から

日本人同士の会話において、親しい相手からの「要求」と親しくない相手からの「要求」に対して、どのような「断り」が現れるのかを、「フェイス複合現象」と「意味公式」に基づいて考察する。

表 4)「親疎関係」が変数の場合に現れる「フェイス複合現象」

（「親」は親しい関係での「断り」であり、「疎」は親しくない関係での「断り」である。以下同様である。）

親疎関係	直/断のみ	S/F						M/F						H/F	
		「断」-p/f		「断」-n/f		「断」-s/f		「依」-p/f +「断」-p/f		「依」-p/f +「断」-n/f		「依」-p/f +「断」-s/f		「依」-p/f	
		ON	OFF	ON	OFF	ON	OFF	ON	OFF	ON	OFF	ON	OFF	ON	OFF
親	44	38	43	13	39	4	17	21	102	5	16	2	18	24	14
疎	32	18	23	12	25	0	16	35	131	7	21	1	25	38	16

日本人は、相手との「親疎関係」の影響に関わらず、主に「直接的断り」を伴わず（**OFF**）＋**MUTUAL FACE** の「依頼者の **positive face**＋断る側の **positive face**」を使用して断っている。しかし、この表５）からは次のような相違点が見られる。

①相手が親しくない場合に比べて、相手が親しい場合、日本人は断る側のフェイスを中心に、「直接的断り」を伴わず（**OFF**）＋**SPEAKER' S FACE** の「断る側の **positive face**」＞「直接的断り」を伴った（**ON**）＋**SPEAKER' S FACE** の「断る側の **positive face**」＞「直接的断り」を伴わず（**OFF**）＋**SPEAKER' S FACE** の「断る側の **negative face**」＞「直接的断りのみ」の順に多く使用している。

②相手が親しい場合に比べて、相手が親しくない場合、日本人は相手の **positive face** を中心に、「直接的断り」を伴わず（**OFF**）＋**MUTUAL FACE** の「依頼者の **positive face**＋断る側の **positive face**」＞「直接的断り」を伴った（**ON**）＋**MUTUAL FACE** の「依頼者の **positive face**＋断る側の **positive face**」＝「直接的断り」を伴った（**ON**）＋**HEARER' S FACE** の「依頼者の **positive face**」の順に多く使用している。

親しい相手と親しくない相手の場合における「断り」の「フェイス複合現象」には、次のようなストラテジー（意味公式）が用いられている。

表 5）「親疎関係」が変数の場合に現れる「意味公式」

	D	R	S	A	I	Q	AL	P	PO	F	H	L
親	161	256	216	46	18	6	52	1	23	288	1	13
疎	150	260	334	44	23	11	49	3	20	327	0	2

例 6）親しい先輩の「お金の要求」—親しい後輩の「断り」：

「直接的断り」を伴わず（**OFF**）＋**SPEAKER' S FACE の「断る側の positive face」**

H：あのう、悪いんだけど、今会費を払わなければいけないから、５千円ぐらいあれば ちょっと貸してくれない？

J：ア～、ちょっと～今・お金ないっすね～。　（「感嘆詞」＋「理由」）

例 7）親しい後輩の「お金の要求」—親しい先輩の「断り」：

「直接的断り」を伴わず（**OFF**）＋**SPEAKER' S FACE の「断る側の negative face」**

H：００先輩、あのう、悪いんですけど、今会費を払わなければいけないんですよ。５千円ぐらいあれば、ちょっと貸してもらえませんか？

J：ヤ～、お金の貸し借りはよくないんじゃない。　（「感嘆詞」＋「非難」）

例 8）親しくない先輩の「アンケート調査」—親しくない後輩の「断り」：

「直接的断り」を伴わず（**OFF**）

＋**MUTUAL FACE** の「依頼者の **positive face**＋断る側の **positive face**」

H：課題で、今大学生の生活についてアンケート調査をとっているんだけど。
時間あれば答えてくれない。

J：ヤ～、今日はちょっと～、これからもうすぐ、帰らないとだめなんで、
申し訳ないですけど。　　（「感嘆詞」＋「理由」＋「謝罪」）

例 9）親しくない後輩の「お金の要求」—親しくない先輩の「断り」：
「直接的断り」を伴った（**ON**）＋**HEARER' S FACE**

H：００先輩、あのう、悪いんですけど、 今会費を払わなければいけないんですよ。
５千円ぐらいあれば、ちょっと貸してもらえませんか？

J：アッ、すみません、貸せません。　　（「感嘆詞」＋「謝罪」＋「直接的断り」）

今回相手との「親疎関係」が変数の場合、即ち、親しくない相手に比べて、親しい相手に対しては、例 6 と例 7 のように断る側の **positive face** や **negative face** を中心に「断り」が多く行われている。このような「断り」を遂行する際のストラテジーは、例 6 のように断る側の positive face を念頭においた「理由」と、例 7 のように断る側の negative face を念頭においた「非難」が多く使用されている。他にも「回避」、「代案提示」など、断る側の negative face を間接的に表す場合も見られている。したがって、相手と親しい関係の時に **SPEAKER' S FACE** に多く働きかけることによって、相手よりは断る側の自分自身のイメージを重視していることがうかがえる。

このように親しい相手に対する日本人の「断り」では、断る側のフェイスが中心となって行われる反面、親しくない相手の場合は断る側のフェイスより、相手のフェイスを考慮する傾向が多く現れている。例 8 と例 9 のように、相手の positive face を考慮する **MUTUAL FACE** や **HEARER' S FACE** が主に使用されている。特に相手のフェイスに対する配慮のために「謝罪」が多く使用され、親しい相手に対する「断り」の「謝罪」より 118 回も多く用いられた意図がうかがえる。親しくない相手に対してわざわざ「謝罪」など相手のフェイスを考慮してあげることは、将来の人間関係や、親しくない中で要求してくる相手に対する思いやりであろうと考えられる。

6.2　「ジェンダー」の観点から

親疎関係が「断り」の変数になる場合、親しみが高いグループには自己イメージを考慮した **SPEAKER' S FACE** を用いて現在の相手との人間関係を重んじるが、親しみが低いグループには要求者である相手のフェイスを考慮して、将来ありうる相手との人間関係を重んじることが

分かった。さらに、ここでは日本人同士の会話における男性と女性の「断り」を考察してみる。

表 6）男性と女性の「断り」

性別	親疎関係	直/断のみ	S/F						M/F						H/F	
			「断」-p/f		「断」-n/f		「断」-s/f		「依」-p/f＋「断」-p/f		「依」-p/f＋「断」-n/f		「依」-p/f＋「断」-s/f		「依」-p/f	
			ON	OFF	ON	OFF	ON	OFF	ON	OFF	ON	OFF	ON	OFF	ON	OFF
男性	親	21	20	24	9	27	3	10	9	45	4	8	1	8	5	6
	疎	21	7	20	10	17	0	14	16	44	3	9	0	19	13	6
女性	親	23	18	19	4	12	1	7	12	57	1	8	1	10	19	8
	疎	12	11	3	2	8	0	2	19	87	4	12	1	6	25	10

相手との親疎関係において、日本人の男性と女性の「断り」は前節で指摘したように、「直接的断り」を伴わず（OFF）＋MUTUAL FACE の「依頼者の positive face＋断る側の positive face」が多く使用されていた。さらに男性と女性の「断り」においても似た使用傾向が見られるが、次のような相違点も同時に見られる。

①男性は女性に比べて、「直接的断り」を伴わず（OFF）＋ SPEAKER' S FACE の「semi face」と「直接的断り」を伴わず（OFF）＋MUTUAL FACE の「semi face」、即ち「semi face」をより多く用いて、親しくない相手に断る傾向がある。
②女性は男性より、相手との親疎関係による「直接的断りのみ」の使用傾向が異なる。
③女性は親しい人には「直接的断り」を伴わず（OFF）＋ SPEAKER' S FACE の「依頼者の positive face」と「直接的断り」を伴わず（OFF）＋ SPEAKER' S FACE の「semi face」を多く使用し、親しくない人に対しては「直接的断り」を伴わず（OFF）＋MUTUAL FACE の「依頼者の positive face＋断る側の positive face」を多く使用する傾向がある。

例 10）親しい先輩の「お金の要求」―親しくない後輩の「断り」：
　「直接的断り」を伴わず（OFF）＋MUTUAL FACE の「依頼者の positive face＋semi face」
H：あのう、悪いんだけど、今会費を払わなければいけないから、５千円ぐらいあれば、
　ちょっと貸してくれない？
J：あ、すみません。今～金ないんで、他の人に頼んでください。
（「謝罪」＋「理由」＋「代案提示」）

全般的に日本人の男性と女性は、相手との親疎関係を「断り」の変数にした場合、似た「断り」の使用傾向が見られる。しかし、男性の場合は例 10 のように「**semi face**」を用いて、親しくない人に断ることが女性の「断り」より多く現れる。男性の断る側は相手のフェイスを「謝罪」によって保持しながら、同時に自身のフェイスも「理由」を使用して保持している。その後、「代案提示」という第 3 者に責任を転嫁させて、「断り」の会話を終わらせようとする意図が見られる。

例 11）親しい先輩の「お金の要求」—親しい後輩の「断り」:「直接的断りのみ」

H：あのう、悪いんだけど、今会費を払わなければいけないから、５千円ぐらいあれば、ちょっと貸してくれない？

J：うん～いやです。　（「直接的断り」）

例 12）親しい先輩の「アンケート調査」—親しい後輩の「断り」:

「直接的断り」を伴わず（**OFF**）＋ **SPEAKER' S FACE** の「**依頼者の positive face**」

H：課題で、今大学生の生活についてアンケート調査をとっているんだけど。時間あれば答えてくれない。

J：・・やっ、時間ないです。　（「理由」）

例 13）親しくない後輩の「お金の要求」—親しくない先輩の「断り」:

「直接的断り」を伴わず（**OFF**）

＋**MUTUAL FACE** の「**依頼者の positive face**＋**断る側の positive face**」

H：００先輩、あのう、悪いんですけど、今会費を払わなければいけないんですよ。５千円ぐらいあれば、ちょっと貸してもらえませんか？

J：あは、ごめんね。今ちょっとないんだ。　（「謝罪」＋「理由」）

女性は、例 11 のように、親しい人に対して「直接的断り」を多く使用している。これは男性の使用傾向と異なるところである。女性は親しければ親しいほど、相手に対して断ることの負担感を持たず、気軽に断る傾向があると言えよう。

さらに女性は親しい人に対しては、断る側のフェイスを保持しながら断ることが多い。例 12 で見られるように断る側のフェイス（**SPEAKER' S FACE**）を保持することが分かる。つまり、日本人の女性は、親しい相手から要求されると、断った後のリスク（人間関係の損傷）を考慮せず、自分自身のフェイスを保持する「意味公式」を用いて「断り」を遂行することが分かる。一方、親しくない人の場合（例 13）は、相手のフェイスも考慮する「**MUTUAL FACE**」が使用されており、親しい相手より一層気を配る断り方が見られる。

7. まとめ

「断り」は断る側が自らの negative face(依頼に添えずに自由にいたい・応じたくない)の保持を念頭においた negative politeness を伴うことが多いと一般的に考えられがちである。しかし、negative politeness を伴う「断り」には断る側の negative face を念頭においた「意味公式 or ポライトネス・ストラテジー」以外にも、断る側の positive face、依頼者の positive face を補償するファクターが組み合わされている。そして、その組み合わせによって、「断り」のリスクを最小限にしようとする断る側の意図が現れる。今回既存の「断り」の言語構造の分析とともに、言語運用を「フェイス複合現象」を導入して、「親疎関係」が与える日本人（大学生）の「断り」の特徴を考察した。

「親疎関係」が「断り」の変数になる場合、親しみが高いグループには断る側の positive face を考慮し、保持する **SPEAKER' S FACE** を念頭に、「理由」、「回避」、「代案提示」を用いて現在の相手との人間関係を重んじるが、親しみが低いグループには要求者である相手の **positive face** を念頭に「謝罪」を用いながら、相手との将来の人間関係を重んじるという共通点がある。

さらに男性と女性の「断り」においては、男性と女性はともに親しくない相手に対して相手のフェイスを保持しようとする傾向があるが、さらに男性は「semi face」を用いて断る側のフェイスを保持する傾向もあることを指摘した。

〈注〉

1) Searle(1969)は、発話行為とは人間におけるコミュニケーションの最小単位であり、言葉を話すこと、陳述、命令、質問、約束、依頼などの発話行為を遂行することに一致すると述べている。
2) 本論文の台詞は例６から参照されたい。
3) 三宅（1994：31）「ウチ：家族やごく親しい人々」「ソト：親しくないが自己やウチと関連がある人々」「ヨソ：自己やウチと関係がない人々」。今回はウチとソトに絞って対照する。
4) 日本語と韓国語が話せる人に「日本語と韓国語の正しい文字化、韓国語の正しい日本語訳、適切な分類」であるか、そしてミスや問題点はあるかを確認してもらった。
5) B&L が定義した「フェイス(face)」の概念は、各文化における「面目」、「面子」、「顔」などの固有の概念と混同・誤解されているので、ここでは「フェイス」に表記する。しかし、下位分類の **positive face** と **negative face** は英語で表記する。
6) 他の人から邪魔されたくない、抑えつけられたくない、行動を自由に選択したいといった欲求。
7) 他の人から好かれたい、認められたい、評価されたいといった欲求。
8) フェイスに働きかける **politeness** に関する表記は英文で記す。
9) FTA の見積もり(相手のフェイスを脅かす度合い)=「社会的距離」+「支配力」+「ある行動の負担度」。
10) Tomas(1995)は「言われることに多大な期待がかけられているために、言わないでおくこと自体が非常に大きな FTA になる」場合もあると指摘している。
11) ①～⑤は宇佐美(2002)、寥(2004)、権(2005)を参考。
12)「断り」の意を表に表す「直接的断り」を示す。
13) ここでの意味公式とは、より細かく分類した「断り」のストラテジーの種類と考えてよい。
14)「無意味語」、「間投詞」、「感動詞」、「感嘆詞」、「言いよどみ」、「埋めぐさ」などの遊び言葉である。
15) 本論文では、「感嘆詞」、「呼称」、「笑い」は「断り」の意を伝える主なストラテジーではなく、「感嘆詞」、「呼称」、「笑い」以外の意味公式を補助する補助的ストラテジーと見なす。田窪（2005：15-18）は、「感動詞」は、心的情報処理操作が音声的身振りとして外部に反映したものであり、それ自体では

意味がないものでも特定の文脈で発するだけで意味を生じる場合があると言う。朴（2006 : 40）も「沈黙を回避する」、「話し手が発話を継続することを示す」、「話を和らげる」などの機能を挙げている。

16) 「semi」という概念によって、人間の持っている semi face が、positive face や negative face とは異なって、不完全な、片側のフェイスを示すことではないことを断りたい。本稿における semi face とは一つの発話の中における全体のフェイスに positive face と negative face が半々入れ混じっていることを示し、semi face は他に「complex face」、「dual face」、「alternating face」としても捉えてよい。

〈参考文献〉

任　炫樹（2003）「日韓両言語における断りのストラテジー　―言語表現の違いとストラテジー・シフトを中心に―」『ことば』第24号　現代日本語研究会　pp.60-77.

元　智恩（2003）「断わりとして用いられた「ノダ」－ポライトネスの観点から－」『計量国語学』第24巻1号 計量国語学会　pp.1-18.

宇佐美まゆみ（2002）「ポライトネス理論の展開」『言語』Vol.31、No.1～Vol.31、No.13 大修館書店.

生駒知子・志村明彦（1992）「英語から日本語へのプラグマティク・トランスファー：『断り』という発話行為について」『日本語教育』79号　pp.41－51.

熊井浩子（1993）「外国人の待遇行動の分析（2）－断り行為を中心にして－」『静岡大学教養部研究報告第28巻 第2号 pp.1－37.

権　英秀（2005）「断りから見た日・韓両言語の比較研究」新潟大学修士論文

――――（2007a）「日・韓両言語の初出マーカー」『日本学報』第70号　韓国日本学会.

――――（2007b）「日本人の大学生と高校生の『断り』表現－年齢層の差によるポライトネスを中心に－」『日本語文学』第34集　大韓日語日文学会.

――――（2008a）「日本人学生における「断り」表現―大学生と高校生のフェイス複合現象から―」『日語日学』第37号 大韓日語日文学会 pp.5-22.

――――（2008b）「日・韓両言語の「断り」・シフト―大学生を対象に―」『ことばとくらし』第20号新潟県ことばの会 pp.横1-20.

――――（2008c）「フェイス複合現象からみた「断り」表現―日・韓両大学生を対象に―」『日本学報』第77号 韓国日本学会 pp.1-13.

――――（2009）「断り表現における直接的断りの位置づけ―日・韓両言語を対象に―」『ことばとくらし』第21号　新潟県ことばの会 pp.1-10.

田窪行則（2005）「感動詞の言語学的位置づけ」『言語』第34巻11号 大修館書店 pp.14-21.

朴　成泰（2006）「韓国語と日本語の言い淀み（fillers）に関する対象研究」『日本語文学』第28号 韓国日本語文学会 pp.35-53.

三宅和子（1994）「日本人の言語行動パターン－ウチ・ソト・ヨソ意識－」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第9号　筑波大学 pp.29－39.

寥　育君（2004）「日本と台湾における断り表現の対照研究」新潟大学修士論文.

Beebe, L. M., Takahashi, T. & R. Uliss-Weltz（1990）“Pragmatic Transfer in Refusals.” In R.C.Scarcella,E.Anderson & S.C.Krashen eds.）, *Developing Communicative Competence in a Second Language*. NewYork : pp.55-73, Newbury House Publishers.

Brown, P. & S. C. Levinson（1987）*Politeness : Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.

Goffman, E.（1976）“Replies and Responses.”*Language in Society*. Vol.5Cambridge University Press.

Miriam E. &J. Bodman（1993）“Expressing Gratitude in American English” *English Teaching* 49.

Olshtain, E. & A. Cohen (1993) Apology: A speech-act set. In Wolfson, N. & Judd(Eds) *sociolinguistics and language acquisition*. Rowley, MA; Newbury House.

Searle, S. C. (1969) *Speech Acts: An Essay in the Philosophy of Language*. Cambridge: Cambridge University Press. 坂本百大・土屋俊訳(1986)『言語行為-言語哲学への試論』勁草書房.

Thomas, J. (1995) *Meaning in Interaction : An Introduction to Pragmatics*. London:Longman. 浅羽亮一監修、田中典子・津留崎毅・鶴田庸子・成瀬真理訳（1998）『語用論入門－話）『語用論入門－話 し手と聞き手の相互交渉が生み出す意味』研究社.

이　해영(2003)「일본인 한국어 고급 학습자의 거절 화행 실현 양상 연구」『한국어교육』第 14 巻 2 号 한국어학회 pp.295-326.

최　상진（1992)「한국인의 문화－심리적自己」『중대논문』35 중앙대학교 pp.203-223.

（「言語の普遍性と個別性」プロジェクト所属）